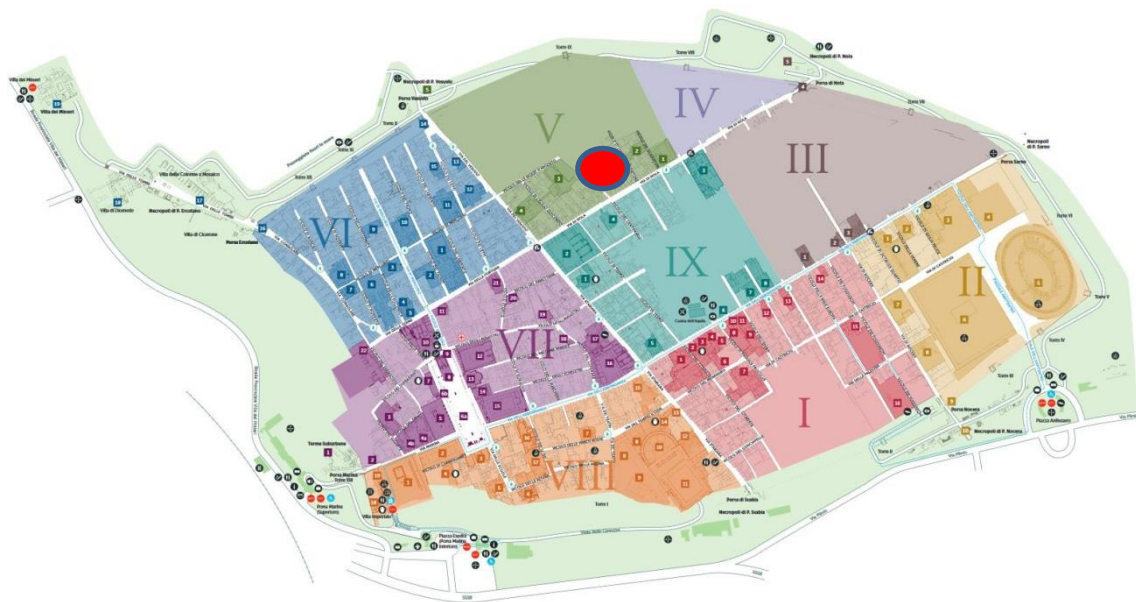


昨年 10 月に第一報がもたらされた、新出土のグラフィッティ（壁などに印された文字史料）が話題を呼んでいる。これがポンペイを埋没させた 79 年のヴェスヴィオ火山の噴火が生じた日について、重要な手がかりを与えるかもしれないからである。つい先ごろには日本のテレビ番組で紹介されることにもなった（6 月 29 日放映の TBS 『世界ふしぎ発見』）。噴火の日付は、定説的には 8 月 24 日であるとされてきた。この日付の論拠は、噴火を伝える後 2 世紀初頭の小プリニウスの書簡（この噴火によって叔父である大プリニウスが命を落とした）である。しかし考古史料からは噴火が真夏に生じたとは考えられない状況証拠があり（秋から冬の可能性がある）、また日付を記す書簡当該箇所の写真には多くの異本もあることから、それが正しいかどうかを巡っては、19 世紀の末から論議があった。このあたりの経緯に関しては、筆者はかつて「ポンペイはいつ埋没したのかー噴火の日付を巡る論争」（豊田浩志編『モノとヒトの新史料学』勉誠出版、2016 年所収）で取り上げたことがあるので、詳細はそちらをご覧くださいと思うが、当時日付を見直す最新かつ最大の論拠であるとされていたポンペイ出土のある貨幣発行時期について、当初の想定が間違っていたことが明らかになったことで、この問題が振出しに戻ってしまったということ報告した。この度の新発見を受けて、当 HP 主催の豊田先生から、この論文の続報をというご依頼をいただいたので、まだ現地未検分の段階ではあるが、概要を報告させていただく。

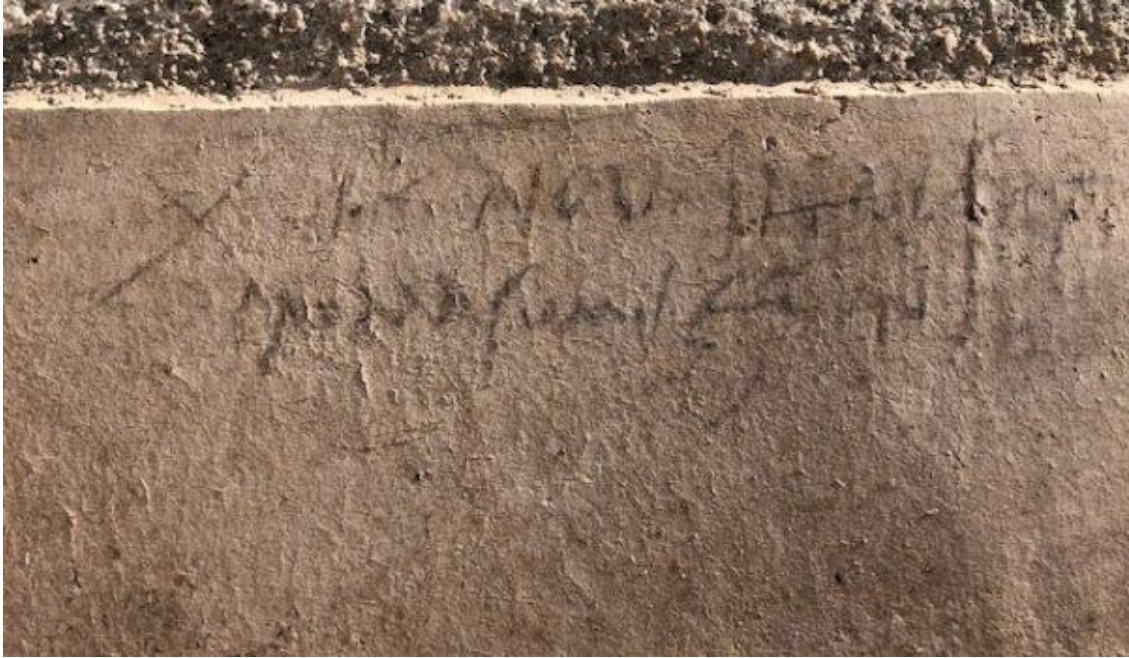
この新たな史料は、ポンペイ考古監督局がポンペイ遺跡発掘開始 270 周年（2018 年）を記念して開始したポンペイ遺跡第 V 地区内の発掘調査の過程で出土した。発掘地区はポンペイの地図ではこのあたりである（第 V 地区の赤い円で記したところ）。



ポンペイ考古監督局のホームページによれば、西側の「銀婚式の家」と東側の既発掘地区との間の「くさび状」に取り残された未発掘箇所を対象にしたものという(下図参照)。「銀婚式の家」(V,2,i)は壮麗な壁画で知られているが、この未発掘地の存在によりアクセスが悪く、また周囲の堆積土のもたらす湿気により保存状況が懸念されていたことから、かねてから発掘が待望されていた場所であった。この発掘の過程で、「ユピテルの家」と「庭のある家」の2軒の家屋が、79年の噴火堆積層の中から、すなわちこれまで盗掘を含めた発掘がなされていない状態で検出されたとされる(問題の銘はその内「庭のある家」から出土)。



この新史料発見を最初に報じたのは、ポンペイ考古監督局のHPによるプレスリリースであった(10月16日)。この発表はたちまち世界中に駆け巡り、噴火の日付問題を改めて活性化させた。



(ポンペイ考古監督局が発表した写真)

上の写真に印された文字は当初は，“XVI K Nov in[d]ulsit pro masumis esurit[ioni],”と釈読された。大よその意味は「10月17日に彼は大いにながつ食べた」ということである。この読みはポンペイ考古監督局のHPから判断される限りは、碑文学者であり、近年出版された『ラテン碑文集成』第4巻（ポンペイを扱う）の補遺（supplementum）編集者の一人でもあるアントニオ・ヴァローネ博士によるものである。問題は、最初の部分に「11月の朔日の16日前 XVI (ante) K(alendas) Nov(embres) = 10月17日」という日付が書かれていたことであった。月日は書かれているものの、年が記されていないこの銘がどうして79年のものであると断定できるのか、実はこの銘が発見された家は、79年の噴火当時修復中であり、家の他の部分は修復が終わっていたが、この銘が見つかった部屋だけは未だ工事が完了していなかった状態であった。さらにこの落書きが、それほど耐久性のない木炭チョークで書かれていたことから（一年は持たないと判断している）、79年の噴火直前、まだ修復が完成していない壁に、10月17日に書かれた文字であるという推測に基づくものであった。

この一報に接して最初に感じたことは、いくらすぐに消せる木炭チョークで書かれたとはいえ、修復された壁の上に（上の写真を見る限りは、文章が書かれた箇所は、新たな壁の下塗りが終わっている状態かと推測される）、余りメッセージ性や緊急性のない落書きなどするだろうか、またラテン語も正規の文章とは綴りや平仄の点でかなり乱れている（このこと自体はポンペイの銘文ではありうることであるが）といったことであった。するとこの報告に畳み掛けるように、10月19日にポンペイ考古監督局が新たな釈読の可能性をプレスリリースした。この新たな読みはピサにある *Scuola Normale Superiore*（高等研究院）の古ラテン語銘文学講師ジュリア・アツマナーティ博士の手による。彼女によれば当の銘は“XVI (ante) K(alendas) Nov(embres) in olearia / proma sumserunt [...]”と読むべきであるということである。「10月17日に彼

らはオリーブ油貯蔵室からそれを取り出した」といった意味であろうか。こちらは何か仲間へのメッセージが感じられる文章であり、先の読みよりも状況的にはより自然に感じられるが、主語が特定できない3人称複数形になっているなど、腑に落ちないこともある。

いずれにせよ、この銘の持つ価値は、日付が西暦79年であるという仮定が正しいかどうかということにかかっており、繰り返しになるが、木炭チョークによる字の耐久性と、噴火当時に修復中の壁に書かれていたという状況証拠が、その最大の根拠になっている。しかしいずれの釈文を取っても、銘そのものは補綴をしなければならぬような状態で見つかっており、考古監督局が述べているように10月24日に噴火が生じたとするならば（グレーテ・ステファニ博士が近年主張している日付である。前出坂井論文参照）、わずか1週間ほどでそれほど劣化が進むだろうかという疑問も生じる。当該の壁が、私が推測するように噴火直前に新しく下塗りされたものであるということが果たして実証できるかどうか、研究調査の進展を引き続き注視してまいりたい。最後になるが本稿をまとめるにあたって様々なご教示をいただいた、豊田先生および滋賀大学の清水裕先生に感謝申し上げる次第である。

付：ポンペイ考古監督局の当該 [http](http://pompeisites.org/non-categorizzato/pompei-i-nuovi-scavi-della-regio-v/) は以下のとおりである（イタリア語版）

ポンペイ遺跡第5地区の発掘調査について

<http://pompeisites.org/non-categorizzato/pompei-i-nuovi-scavi-della-regio-v/>

10月16日付の銘文発見の速報

<http://pompeisites.org/comunicati/duo-dimore-di-pregio-tornano-alla-luce-nella-regio-v-una-nuova-iscrizione-supporta-data-eruzione-a-ottobre/>

10月19日付、新たな銘文解釈についてのプレスリリース

<http://pompeisites.org/comunicati/nuova-iscrizione-supporta-la-teoria-della-data-dell-eruzione/>

第V地区の発掘調査におけるその他の新たな知見について

<http://pompeisites.org/press-kit/i-nuovi-scavi-della-regio-v/>

なお、文中の挿図は全てポンペイ考古監督局のHP上に公開された資料を引用した。